日本特殊教育学会第五回大会

「幼年期教育」

シンポジウムより

九月三十日に、大阪教育大学にて日本特殊教育学会の大会の際、特殊児童の幼年期教育について、シンポジウムが行なわれた。京都大学の園原太郎教授の司会のもとに、意義深い討論が行なわれた。盲幼児については、東京教育大学、佐藤泰正氏より、ろう幼児については、東京教育大学今井秀雄氏より、精神薄弱幼児については、お茶の水女子大学、津守真氏より、肢体不自由幼児については、岡山県旭川児童院の江草安彦氏より、言語障害幼児については、お茶の水女子大学、田口恒夫氏より、それぞれ、興味ある報告がなされた。

盲の幼児教育については、従来より、わが国の盲教育においては、あまり取り上げられていなかったようである。盲学校の中にも、幼稚部を設けているところはわずかであり、盲幼児は、概して家庭の中だけで生活していることが多いようである。また、親も、わが子を外につれ出すことを好まない傾向があった。しかし、盲児はやがて普通の社会の中に入っていく者である。社会から隔離して育てることは、盲児の人格的成長にとって望ましいことではないであろう。盲幼児をもつ親も、盲児だからといって、特別扱いをすることなく、普通児に対するのと同じような気持で扱うことが必要である。また、盲教育も、点字教育のみでなく、全人格的教育に目をむけていくべきであり、幼児期からの教育を重視していくことが望まれる。

ろうの幼児教育については、その必要についてすでに著しく認識されてきた。ほとんどすべての聾学校に幼稚部が設置され、それも二歳ころからの教育が強調されている。その一つの理由としては、補聴器や音声科学の進歩により、早い時期より、残存聴力をできるだけ活用することの可能性が開かれたことも考えられる。この時点において、ろうの幼児教育においても、狭い意味の言語教育のみを考えるのでなく、ひろく人間関係を学び、社会生活を学び、全人的教育を考えることが望まれる。

精神薄弱児については、盲やろう以上に、これは精神薄弱であると断定することは困難である。幼児期においては、むしろ精神発達遅滞幼児といった方がよいであろう。発達がおくれているということはっきりしたとしても、精神薄弱という病気、あるいは、そういう特殊な人

種があるわけではないからである。おくれという場合も、おくれと判断する規準をやめてしまえば、むしろ発達の個性と考えることができる。だから、精神薄弱幼児という特殊なカテゴリーがあって、特殊な教育法があるのではない。精薄幼児を差別して、隔離して扱うのではなく、普通児の幼稚園の中でもうけいれていく道を見出していくのが理想的であろう。しかし、要は、発達のおくれた幼児が十分に力を発揮して生活することのできる場が必要なのであって、現状において普通幼稚園でそれがみたされないならば、小人数の治療教育を主とする場を用意することが必要である。

肢体不自由幼児についても、言語障害幼児についても、似たような事情がある。肢体不自由児は、身体的に生活の不自由があるのであって、周囲の社会がそれをうけいれていくことができるようになればよいのである。

言語障害幼児についても、そういう特殊なカテゴリーがあるわけではない。幼児期から、幼児の障害によって、あまりにこまかいカテゴリーに区分し、それぞれに教育体系を作ることは、いかにも学問的にみえるけれども、実際の幼児の発達に望ましいことではない。学校教育体系をまず作り、管理者をおいて、それに合うような子どもを集めるということは、考え方として順逆転倒である。

むしろ、それぞれの子どもにとって、どういう教育が望ましいかを考え、それに合うような教育の場を作っていくことを考えねばならないのである。また、それとともに、いわゆる普通の子どもが、この子どもたちとあたりまえの気持でつき合うことを、早くから学ぶようにしなければならない。そのような教育は、幼児期からはじめるのがもっともよい。幼児の段階では、この子どもたちと何のわだかまりもなく、いっしょに遊べるのである。

今回のシンポジウムで共通して認識されたことは、幼児期において、普通教育と特殊教育とを判然と区別するのではなく、むしろ両者を近づけていくことの必要であった。最後に、園原教授は、幼児教育は体系化されていないと一般にいわれ、それは一面において事実であろうが、そこに幼児教育の特色があるのではないかということを付け加えられた。特殊児の幼児教育は、あまり体系化されすぎるとかえって弊害を生ずることである。欠陥のある幼児であっても、全人的な発達を保護することが必要なのである。

普通児の幼稚園は、もう少し視野をひろくして、欠陥のある幼児が、どの園にも数人いることはあたりまえだと考えるようになる必要があろう。しかし、それには、一クラスの幼児数がせめて三十人以下でなければならないであろう。また、かなり大幅な個人差を包容できるようなプログラムが必要であろう。そうできるようになれば、普通児の幼稚園はその内容においても、一歩前進するであろう。

（津守　真）